

# ロシアおよび海外公文書館における 「正義の人」杉原千畝に関する新たな文書の発見： 国際協力の経験と展望

イリヤ アルトマン  
Ilya Altman

難民問題はヨーロッパと中東の現代史におけるもっとも切実な問題の一つである。第二次大戦時に生じた同様な問題がどう処理されようとしたのかの経緯は、世界の国々の公文書にも反映されている。その歴史的経験は、出典のデータを事前に検討した上での特別な研究の対象とされるべきものである。

2015 年は、ポーランドからのユダヤ系難民がリトアニアおよびソ連邦を経由して日本を目指すという特異な事態のはじまりから 75 年目にあたる。この間の経緯には、日本国在カウナス領事代理杉原千畝の活動が深くかかわっている。ちなみに杉原千畝は晩年、この活動により「世界諸国民の正義の人」の称号を与えられた。杉原千畝はホロコーストの歴史に関わる、もっとも知られた人物の一人である。2011 年には、杉原千畝の生涯と活動、またカウナス・モスクワ・ウラジオストク・日本のルートを通じたユダヤ難民の問題に係る公文書をロシア、日本、リトアニア、フィンランドの公文書館から発見するための国際プロジェクトが開始された。国士舘大学 21 世紀アジア学部アジア・日本研究センターの研究プロジェクトでは、この間に著者が直接接することができた資料の内容から明らかになった、杉原による難民への通過ビザ発給に係る新たな事実を紹介し、諸兄の注意を喚起するとともに、杉原千畝研究を新たな段階に進める手がかりとしたい。

まず、本稿著者は、『ゲネジス』基金が支援して実施された『ヤド・ヴァシェム』研修において諸外国で出版された数十冊の書籍を検討した。公文書を発見するための方法を決定するための主な出典の一つとなったのが、リトアニアにおけるユダヤ難民組織のリーダー・ゾラフ・ヴァルガフティク<sup>\*1</sup>が著したモノグラフィーである。ヴァルガフティクはのちに、イスラエルの著名な国政の指導者・社会活動家となった人物で、このヴァルガフティクの個人所蔵文書の中には、著書を執筆するための資料のほか、数多くの文書、往復書簡、難民たちの消息や移動ルート、日本のユダヤ慈善団体による難民受け入れに関するデータ<sup>\*2</sup>が含まれている。

プロジェクト実施の過程では、まず、ロシア公文書館にある杉原の履歴関連文書の検討が行われた。文書の大半は、杉原がユダヤ難民救済を開始する以前の時期および、それ以降の時期に関するものであった。ひとつは、1930 年代前半、傀儡国家満州国の行政で活動していた時期に関するも

のである。この時期杉原は、ロシア国立社会政治史公文書館（РГАСПИ, RGASPI）に保管されているソビエト指導部の往復文書、例えばL.M. カガノヴィチおよびV.M. モロトフがスターリンに送った、満州鉄道周辺における日本側との紛争に関する1932年7月10日付暗号電報<sup>\*3</sup>、またロシア外務人民委員部（НКВД, NKID）の文書やロシア移民個人文書（РГАЭ, RGAE ロシア経済公文書館所蔵）<sup>\*4</sup>の中に、杉原の名前が見える。

ロシア連邦外交資料館（АВП, AVP）文書には、杉原に関連する1936年から1937年までの文書が保管されている。プロジェクト実施のため、これらの文書から「マル秘」の公印が外された。プロジェクトの最初の段階で、文書はロシア連邦外交政策資料館の職員に手渡され、その後プロジェクトチームに、1939年10月から1940年6月までの在リトアニアソ連大使館の往復外交文書を閲覧する許可が与えられた。1936-1937年の期間、杉原は当初カムチャッカ半島ペトロパヴロフスクの日本領事館書記として勤務したのち、在モスクワ日本大使館に転勤を命じられたものの、ソ連への入国査証の発給を拒否されている。1937年2月4日外務人民委員部は日本国大使館に対し、杉原は反革命軍（白衛軍）亡命者となつたがりのある「ペルソナ・ノン・グラータ」（Persona non grata 好ましからざる人物）であると伝えた。1937年2月28日副外務人民委員B.S. ストモニャコフは重光葵日本国大使との会見の際、杉原への入国査証発給拒否の理由を説明した：

「杉原は反革命軍（白衛軍）のもっとも過激なグループと親しい関係にあった。我が国にとって敵対的な分子にとどまらず、犯罪分子とも関わりがあった。このような状況の下で、杉原が（モスクワに）滞在することが両国間の友好関係促進に資することはありえない。われわれは、日本国政府が、ソ連に敵対する勢力と共に、ソ連や、ひいては日ソ両国関係に敵対する活動をひそかに行っていた人物を、あくまでソ連に入国させるよう主張していることに、驚きを禁じ得ない。重光大使には満腹の敬意を表するが、大使がどれほどの権威と善意の持ち主であったとしても、すべての大使館員の活動を監視・把握できるとは、到底考えられない。過去の事例によっても、私の見解が正しいことは明白である。杉原への入国査証発給拒否は、大使に対する批判ではなく、日本との友好的な関係を願う気持ちから出たことである。大変残念ではあるが、大使にこれ以外の回答を示すことはできない、問題は最終的に決着したものとみなされるからである。最後に、杉原への入国査証発給拒否についての日本国大使館への説明は、礼節を尽くす気持ちから行われたものである。重大な根拠がある場合には、われわれは理由の説明なくしても、査証発給を拒否する権利があると考ええる。我々の説明は非公式に行われたものであり、この問題で日本政府とこれ以上話し合いを続ける気持ちはない。われわれは最終的な決定を下したのであり、これを見直す可能性もないのであれば、なおさらのことである。（中略）明らかに、日本のある種の人々の中には、ソ連ではこれは許されているとか、許されていないといった、誤ったイメージが存在しているようである。杉原の活動が常識的かつ合法的なものであるようにみえるのも、そういう理解にもとづくものかもしれない。われわれとしては、日本政府が、反ソ活動を行っていた人物を我が国に入国させるよう求めていることに驚きを禁じ得ない。大使閣下には、このような人物の入国を拒否する権利に異議を唱えるべきでないことを理解していただきたい」。

大使との会談を終えるにあたってB.S. ストモニャコフ副外務人民委員は、次のように言明した：「杉原の入国は、両国の友好関係に資するものではない」<sup>\*5</sup>。

ソ連に査証発給を拒否されたのち杉原は、在フィンランド日本大使館に2年間勤務した。今回のプロジェクトで見つかったフィンランド情報機関の文書が示すように、杉原はソ連の情勢に強く関心を示し、許可を得てソ連との国境付近に赴いた際、フィンランド国家保安警察と接触を行っている。杉原は少なくとも二人の、ロシアからフィンランドに移住した市民から情報を得ていた\*<sup>6</sup>。

杉原がリトアニアの首都コヴノ（カウナス）に領事館を開設したのは、1939年10月のことである。複数の研究によると、1940年初めまでにリトアニアには1万4千人から2万人近いユダヤ難民がいたと思われる。1940年6月ソ連軍によるリトアニア進攻後、大半の難民はリトアニアを出国しようとする動きを活発化したが、その理由は、1941年1月までに難民がソ連国籍を取得しなければならなかったためである。難民にとって出国後の目的地の一つとなったのが日本であった。ここで重要な点をひとつ指摘しておきたい。杉原によるヴィザ発給は、日本国外務省の姿勢だけではなく、ソ連政府の姿勢にも係っていたという点である。

リトアニア駐在ソ連大使館の、1939年10月から1940年6月にかけての外交書簡（ソ連公使の報告書のひとつ）には、「ロシア語に堪能な」日本の領事代理がフィンランドから着任したことが記されている。ロシア外務省対外政策史料館 AGP にあるユダヤ難民の通過に関する資料の大半（ひとつを除いて）\*<sup>7</sup>は、特別のファイルに収められている\*<sup>8</sup>。10件の書類の大半は、ソ連と日本の外交官の会談の記録である。モスクワとウラジオストクで行われたこれらの会談には3人のソ連側外交官と4人の日本人外交官（在ウラジオストク領事を含む）が参加した。意思決定には、ソ連高官（政治局）2人が加わった。一人はヴァチスラフ・モロトフ首相兼外務人民委員、もう一人はアナスタス・ミコヤン外国貿易人民委員。さらに、ウラジーミル・デカノゾフ、アンドレイ・ヴィシンスキー、ソロモン・ロゾフスキーの3人の副外務人民委員も参加している。また、文書にはフセヴォロド・メルクロフ国家安全保障人民委員の名も見える。

このファイルには杉原の名前そのものは見当たらない。しかし、ときに直接に役職名（在カウナス領事代理）が、ときに間接的な形で（問題の経緯を述べるにあたって）記述があり、またヴィザ発給の場所についても、誤り（カウナスではなくタリン）はあるものの触れた個所があるなど、史料は、杉原の果たした役割について再三言及している。こうした資料により、ユダヤ難民のソ連領通過の特徴についての問題点について回答が得られた。

一。ソ連領通過は、独立リトアニア政府から提唱されたものであることが確認された。この提唱は、およそ3万人のユダヤ人がソ連領を通過して逃げこんだ先であるヴィリノ地方を、ソ連がリトアニアに移譲したのちに行われた。この段階では「日本通過」という問題は俎上にはなかった。1939年末から、モスクワ駐在リトアニア大使は、ユダヤ難民をオデッサ経由でハイファに通過させる許可をソ連政府からとりつけようと交渉を行ったが不首尾に終わっていた。リトアニア政府は、難民が携帯していたポーランドのパスポートを、リトアニアのパスポートに交換しても構わないとまで考え、難民通過はビジネスとしても利点があるとして、『インツーリスト』（ソ連国際観光局）の関心を引こうとまでした。

二。資料は間接的ではあるが、この問題の解決におけるソ連側の利害を映し出すものとなってい

る。その利害とは、一つは経済、もう一つはソ連諜報機関の活動にかかわるものである。難民へのソ連通過ヴィザ発給を進めた人物は、モロトフのもとで副外務人民委員を務めた V. デカノゾフ（それより以前内務人民委員部対外諜報部のトップを務めていた）である。1940 年 4 月 21 日この問題について、デカノゾフはモロトフに書簡を送り、ソ連邦は難民および海外のユダヤ人組織から 150 万ドル（およそ 90 万ルーブル）を超える外貨を手に入れることができると力説している。デカノゾフの書簡の最初の部分には、内務人民委員部とは意見を調整済みであるとの文言が二度も出てくる。

三。資料は、1940 年 3 月ウラジオストクにおいて、偽造ヴィザ（このヴィザについては以下で詳述する）があるとして日本側が難民の一部を送還しようとした試みをソ連側が断固として阻止し、また同市の日本領事根井三郎が自らの判断で難民に必要な書類を発給したことを示している。

第四に、これらの文書によって、杉原が難民に発給したヴィザの数を特定することができる。

モロトフがこの問題を検討すると決定し、鉄道と船舶、さらに『インツェリスト』についても可能性を明確にするよう指示を出したにもかかわらず、難民問題が解決を迫られる切実なものとなったのは、ようやく 1940 年 7 月に入ってからであった。

外交政策資料館とロシア国立社会政治史公文書館の文書で明らかになったことは、リトアニアのソ連への併合、また杉原によるソ連側関係者との接触があったからこそ、極東への難民ルートを追加することができたという事実である。ロシア国立社会政治史公文書館の全ロシア共産党（ボリシェビキ）中央委員会ファンドには、1940 年 7 月 25 日付のデカノゾフとソ連大使の、全ロシア共産党（ボリシェビキ）中央委員会宛てた暗号電報が保存されている。この暗号電報には、次のような記載がある。

「現在リトアニアではヴィリノを中心に、旧ポーランドから大量のユダヤ系難民が流入している。難民の一部はポーランドの旅券を所持しているものの、大半が所持しているのは、リトアニア政府が発給した通行証である。こうした難民の総数は 800 人である。

階層別にみると、聖職者、宗教学校の生徒、商売人である。弁護士や、自由業の者もいる。

これらの難民は、親戚がいるパレスチナおよびアメリカへの出国を望んでいて、いずれもしかるべきヴィザと金銭を所持している。

これらの難民をリトアニアに放置することは望ましくない。したがって、かれらに、至急ソ連通過を許可し、50-120 名ずつのグループを編成して出発させることが相当と考える。ご指示を乞う」\*<sup>9</sup>。

この電報の 4 日後には、「リトアニアに滞在するポーランドからのユダヤ系難民にソ連を通過する許可を与える」との、全ロシア共産党（ボリシェビキ）中央委員会政治局決定がスターリンの署名入りで出され、モロトフ外務人民委員とベリヤ内務人民委員に抜書きが送られた\*<sup>10</sup>。

経由地日本に向かう難民の通過に関する外務人民委員部の 1941 年 4 月 29 日付文書には、「1940



年8月日本国領事により、一年を期限とする通過ヴィザが大量に、リトアニアからアメリカに向かうユダヤ系難民に発給された」とある。杉原が発給したヴィザの総数については、ソ連の外交文書には記載がない。しかし日本の外務省史料館には、カウナスで杉原から通過ヴィザを受け取った難民の名簿が保管されている。この名簿は1941年2月はじめ、杉原が日本の外務省に提出したものである<sup>\*11</sup>。そこには1940年7月9日から8月31日までの期間中にヴィザを取得した2139人（ソ連国籍7人を含む）の氏名が記載されている<sup>\*12</sup>。ただ、杉原に関する伝記では、発給ヴィザ6千通とするものが多く、救済されたユダヤ系難民は1万人と記述することもある<sup>\*13</sup>。

ソ連の史料ではどのような数字を挙げているだろうか。本稿著者が1940－1942年の『インツーリスト』の報告書や文書を調査したところ、1940年12月14日全ソ株式会社『インツーリスト』A.C. シニーツィン議長は、「リトアニアからの難民移送」について自社の幹部に伝えていた<sup>\*14</sup>。翌年の移送には4千人が予定されており、このなかには「ウラジオストク経由で極東」に向かう2千人が含まれていた。また「難民は主にカウナスに集中している」と書かれている。

1940年度の全ソ株式会社『インツーリスト』の営業活動に関する経済概観には、1940年にソ連領を通過しウラジオストクに向かったリトアニアからの難民の数が1472人と明記されている<sup>\*15</sup>。そのうち242人は外国人で、ソ連にある外国領事館での入国ヴィザ取得をあてにしていた。したがって、おそらく1230人の難民が杉原の発給したヴィザを持っていたと思われる<sup>\*16</sup>。

1941年度の全ソ株式会社『インツーリスト』の営業活動に関するレポートには、1941年の1月と2月だけで、近くの1500人のトランジット客がウラジオストクに向け移送されたとの記述がある<sup>\*17</sup>。ちなみに、1941年、ラトヴィアとエストニアからのトランジット客はなかった<sup>\*18</sup>。

難民の数の特定にとってもう一つ重要な要因がある。偽造ヴィザの数がどれくらいあったかという問題である。「ソ連時代」にカウナスで製造された偽造日本ヴィザの数については、リトアニア内務人民委員部が1941年初めに行った数件の犯罪捜査書類が示している。これらの捜査書類は本プロジェクト実施の過程で、リトアニア特別公文書館の幹部ならびに職員の格別の協力を得て発見することができた<sup>\*19</sup>。ソ連諜報機関は1941年3月1日、492通の偽造ヴィザを摘発した（偽造ヴィザが、どこでどのように作られたかについての追跡は、1940年12月から行われていた）。杉原がカウナスを出発してから、偽造ヴィザの製作者および所持者の摘発までの期間に、この偽造ヴィザでソ連から出国したユダヤ人は、総計で数百人であったと推測される。

ソ連を通過したユダヤ系難民の総数および、これらの難民のなかに子供がいたか否かを特定するうえで大きな意味を持つのは、難民受け入れに関連した書類である。上述したヴァルガフティクの所蔵文書のなかに、本稿著者は『1941年6月7日付の報告書《日本におけるユダヤ系難民の状況》』を発見した。この報告書はアメリカ・ユダヤ人会議宛で、同会議の在日本代表モイシェ・モイセーエフ（Moise Moiseeff）が発信したものである。この報告書によれば、1940年7月から1941年5月までの期間に神戸に滞在した難民は1046人で、そのうち児童は57人であった<sup>\*20</sup>。とりわけ重要な意味を持つと思われるのは児童の数で、多くの史家の見解とはことなり、その数は少数であった。

難民の一部がこの時期までに日本を出国していた点を考慮したうえで、以上の資料は、ソ連側の出典ならびに、1941年2月5日付の「杉原名簿」の信憑性を改めて裏付けるものとなった。杉原が発給したヴィザの所持者全員がソ連を出国したわけではなく、また偽造ヴィザが存在したことも併せて考えれば、杉原ヴィザによってソ連から日本に出国したユダヤ系難民の数は、2500人が上

限であったと推定することができる。

カウナスでの任務を終えた杉原は、ドイツに赴くことになった。ベルリンでの短い滞在の後、杉原はプラハを経て、1941年3月ケーニヒスベルグ（現カーニングラード）に到着し、5月1日に領事館を開いた。杉原が救済したユダヤ人の中には、ケーニヒスベルグの日本領事館でヴィザの発給を受けた者もいた<sup>\*21</sup>。少なくとも、この町出身の一家族が、1941年春ソ連経由で日本にわたっている<sup>\*22</sup>。

他にもないこのケーニヒスベルグから杉原は、東京、そしてモスクワ駐在大使に電報を送り、ソ連とドイツの戦争が不可避である旨を伝えていた。電報はアメリカの情報機関によって傍受された（1942年以降に行われた暗号解読文は、アメリカの国立公文書館に保管されている）<sup>\*23</sup>。P.A. スドプラトフの回想録によれば、ソ連の情報機関はこれ以上の情報を得ていた。すなわち、日本大使館のすべての通信はソ連諜報機関に筒抜けであった<sup>\*24</sup>。

1941年秋、杉原はルーマニアの首都に、日本大使館付武官として赴任することを命ぜられ、1941年9月12日には家族と共にアンカラに出国、1941年12月21にブカレストに到着した<sup>\*25</sup>。

この地で杉原は、妻、3人の子供、妻の妹と共にソ連軍の捕虜となった。杉原が抑留されていた場所と時期、ソ連領内の収容所に収容されていたか否かについては、文献にはほとんど記載がなく、また信憑性も常に十分とはいえない。この点でもっとも正確であると考えられるのは、ロシア国立公文書館およびロシア国立軍事史料館の文書資料である。Y.A. マリク外務次官およびソ連関係会議抑留者帰還問題全権代表代理 K.D. ゴルビョフに対して（写しは V.V. チェルニューイショフ・ソ連内務次官に送付された）、「現在ルーマニアにある抑留者収容所に、17人の元日本外交団員と領事館職員が収容されている」との通知が行われた。ソ連外務省とソ連内務省は、この17人の日本人を「ソ連経由」（ナホトカ港という地名が記載されている）で出発させ、「本国に帰還する日本軍抑留者第一陣と共に」日本に移送することに反対しなかった<sup>\*26</sup>。

1946年11月25日杉原と家族は他の外交官と共にオデッサに到着した。杉原と故国までの道のりは、その後更に4か月もの長きにわたった。外国市民帰還部部長のガブリロフ大佐は、1946年11月28日ソ連外務省捕虜・抑留者総局局長 M.S. クリヴェンコ中将与ソ連国境警備隊司令官 N.P. スタハーノフ中將に、元在ルーマニア日本国外交団員17人の名簿を送付した（名簿の作成日は1946年11月27日）。名簿には外交官のみならず、妻子の声明も記載されている。3から7までの番号には「スピハラ（原文のまま。原著者註）チウネ、1900年生まれ、在ルーマニア日本国大使館書記；妻ユキコ、1913年生まれ、息子ヒロヒ、1936年生まれ、同チアキ、1938年生まれ、ハルキ、1940年生まれ」とある。杉原の名字の記載は、文書のいずれにおいても誤った記載となっている。また、杉原の家族の一員としてキクチ・セツコ（1920年生まれ、ユキコの妹）が含まれ、8の番号がふられている<sup>\*27</sup>。

日本人外交官と家族は1946年12月11日までオデッサの第186中継収容所に滞在した<sup>\*28</sup>。「赤軍が解放したソ連抑留の外国市民」登録カードのうち杉原の妻と子供たちのカード（杉原本人のカードはなぜか欠けている）から、彼らがまさに1946年12月11日に旅客列車でナホトカに向け出発したことが分かる<sup>\*29</sup>。文書から判断すると、故国に出発する港までの旅程は、ウラジオストクまで、本来なら最長で2週間のところが3か月を要したことになる。おそらく杉原とその家族はモスクワで足止めされていたと思われる。いずれにしても、杉原は1946年末にはモスクワに在り、その後

はシベリア横断鉄道の急行で、ユダヤ難民と同じルートをとったことになる。

杉原は10日間ウラジオストクに滞在した。極東では原稿、会計書類、通信物が二度にわたって押収された。汽船『ノヴォシビルスク』号に乗船する際には、ウラジオストク港の税関で英語とドイツ語で書かれた『ロシア』という題の書籍一冊とメモ書きをした手帳7冊が押収された<sup>\*30</sup>。1947年3月23日のことである。同日、ダーリニー（大連。訳注）では杉原は、ルーマニア語、ドイツ語、日本語、フランス語で書かれた公務の通信書類、ロシア語とルーマニア語の金銭受領書、勘定書きを押収された<sup>\*31</sup>。日本に帰国後、杉原は外務省を解雇された。

ソ連における杉原の仕事にかんする、あまり知られていないいくつかの事実を確定するうえで重要な意味を持つのが杉原自身の書簡である<sup>\*32</sup>。「1946年から<sup>\*33</sup>輸出入を手掛ける商社で、輸入担当責任者として勤務し、現在はモスクワにおります」<sup>\*34</sup>。

ロシア国立経済資料館の史料によると、杉原は1964年11月から1965年5月まで日本の『蝶理』の駐在員としてソ連で勤務、また1965年10月から1975年までは『国際交易』の事務所に勤務した<sup>\*35</sup>。

「テンポ・スギワラ」（時にスギハラ）の名は、1965年版ソ連化学・軽工業省が受け入れた資本主義諸国の代表団名や専門家名を記載した日誌<sup>\*36</sup>にしばしば現われる。また杉原が参加した1965年度の「ソ連化学工業省で開催される会談議事録および懇談記録」もいくつか保存されている。杉原は『東邦物産』の関係者として、こうした会談や懇談に出席した。資料から判断すると、杉原は設備の輸出と原料買い付けのさまざまな可能性についてソ連側と意見交換し、日本企業の幹部と交渉を行うための基盤づくりをしていたと思われる。1965年11月1日から杉原は、「東邦物産」の人事再編に伴い、別の会社に移った。1975年以後は、家族と共に日本に居住するようになった。

（翻訳・岡林茉莉）

\* 1 Zorach Warhaftig, *Refugee and Survivor. Rescue Efforts During the Holocaust*.- Jerusalem, 1988. ヴァルガフティクは杉原ヴィザにより、ソ連経由で日本に向かった人物でもある。

\* 2 『ヤド・ヴァシェム』史料館（YVA）P.20（Zorach Warhaftig.）

\* 3 Сталин и Каганович. Переписки (スターリンとカガノヴィチの通信)。1931-1936年。モスクワ。p.220-221.（ロシア国立社会政治史史料館 РГАСПИ. RGASPI）

\* 4 地質学専門家で極東研究家 E.E.Anert の、満州北部研究博物館創設に関する1933年2月23日付日本側関係者への書簡参照（ロシア国立経済学史料館。RGAE）。

\* 5 АВП（ロシア対外政策史料館）。д5, л.21-25. この資料は、その後の杉原の、1945 - 1947年および1960-1975年の期間におけるソ連滞在には影響を及ぼしていないことを指摘しておく。

\* 6 詳細は、I.Bekaman 著、『杉原千畝と1930年代末フィンランドにおける日本の諜報活動。＜水晶の夜＞の光の中で。ケーニヒスベルグのユダヤ共同体、ヨーロッパユダヤ人の迫害と救済』（Бекаман Й. Чиунэ Сугихара и японская разведка в Финляндии в конце 1930-х гг. – В отблеске «Хрустальной ночи»: еврейская община Кёнигсберга, преследование и спасение евреев Европы», Мо, 2014）参照。

\* 7 АВП（ロシア外務省対外政策史料館）、ф.0146, Оп.24, п.75- д.2

\* 8 АВП（ロシア外務省対外政策史料館）、ф.0146, Оп.24, п.227-д.46

\* 9 РГАСПИ（ロシア国立社会政治史公文書館）ф.17, оп.166, п.627, д.92.

- \* 10 Там же.оп.162, д. 28, л. 62
- \* 11 他にもないこの時期に日本側の関心は、難民の民族構成にあった。この問題は、日本大使館の斎藤書記官が、1941年2月1日ソ連外務人民委員部の G.N. ザルービン領事部副部長（のちに米国駐在ソ連大使およびソ連外務大臣を務めた）との懇談のなかで取り上げたものである。3週間後に斎藤書記官は、「すべての難民がユダヤ人なのか」という具体的な問いを発したが、これに対しザルービン副部長は、「全員ではないが、大半がそうだ」と回答した。
- \* 12 杉原自身 1941 年に、ユダヤ難民はおよそ 1500 人であると証言している。1967 年にはポーランドの歴史研究者宛の書簡のなかで、ヴィザを発給した難民は 3500 人で、そのうちユダヤ人はわずか 500 人という数字を挙げた（Архив Центра «Холокост»（『ホロコースト』センター資料部）、ф.8, оп.1, д.53, л.12）。
- \* 13 H.Levine,p.7, 285-286
- \* 14 ГА（ロシア連邦国立公文書館）、ф. Р=9612, оп.1, д.59, л. 159-161
- \* 15 Там же, д.66, л.5.
- \* 16 Там же, л.15
- \* 17 Там же, оп.2, д.109, л.4-5
- \* 18 Там же, л.5.
- \* 19 リトアニア特別史料館。Ф.К-1, оп.58, 捜査記録№.31778/3;37504/3;P-12661;P-70701;P-12757 他。
- \* 20 YVA,p-20.f.20,p.24-25
- \* 21 Levine, H. Op.cit.,p.143.
- \* 22 Pollack H. Op.cit., p.143.
- \* 23 Sugihara S. «Chiune Sugihara and Japan Foreign Ministry…» p.108-109
- \* 24 Судолатов П.А. Указ. соч., с.32.
- \* 25 Levine H. Op.cit., p.274-275
- \* 26 ГА РФ（ロシア国立公文書館）、ф.9526, оп. 6, д.306, л.142.
- \* 27 Там же, л.224
- \* 28 РГВА（ロシア国立軍事史料館）、ф.450п, оп.7ф. д.1, л.142.
- \* 29 РГВА のカード目録では、杉原幸子には 5959 の番号がふられている。幸子がブカレストから収容所の警備司令部に到着したのは 1946 年 11 月 25 日である。子供たちの番号は 5950-5952. 杉原自身の番号は 5958 であったと推察できる。長男（出生地は日本国、東京と記載あり）は、自分の手で署名している。次男・三男については英語の署名があるが、おそらく千畝の筆跡と思われる。
- \* 30 Там же, л.29
- \* 31 Там же.
- \* 32 1967 年 7 月 21 日付の書簡。著者の知る限り、完全な形で公開されたことは一度もない。書簡の一部は、第二次大戦勃発後杉原に協力していたポーランド軍諜報員の活動に関するもので、杉原を通して「ポーランド地下運動と、ストックホルムに在ったポーランド外交代表部の連絡が行われ」、その一環として「1939 年 9 月のポーランド侵攻の際、敵の手から守られたポーランド軍旗 2 旗」をバリに移送することができたことが書かれている。詳細は 1967 年 7 月 21 日コラブ・ジェブレイク宛書簡を参照されたい。Архив Центра «Холокост»（「ホロコースト」資料センター。以下 АЦХ と記す）、ф.8, Коллекция документов «Праведники Народов Мира»（「世界諸国民正義の人」文書コレクション）、оп.1, д.53, л.5 – 14（コピー）。R. コラブ・ジェブレイクは、この書簡に書かれたいくつかの事実を自著のなかで使っている（Korab=Zebryk R. «Operacja wilenska AK», Warszawa,1985）
- \* 33 АЦХ, ф.8, д.53, оп.1, л.13. 原文のまま引用。これが誤植でないとすると、1964 年までの杉原のモスクワ滞在は長期的な駐在ではなかった可能性がある（別な資料では、たとえば杉原自身のいくつかの自伝的文章および杉原の外交旅券などによると、杉原は 1960 年からモスクワを訪れるようになった）。外国人ビジネスマンとソ連政府役人との会合記録には、1964 年秋以前の記録に杉原の名前を見つけることはできなかった。
- \* 34 これに関する情報は、R. コラブ・ジェブレイクと日本人外交官達との往復書簡に見える。Там же, л.3
- \* 35 Decision of love... p.13
- \* 36 РГЭО（ロシア国立経済資料館）、ф.459, оп.5, д.52, л.4, 7, 8, 13, 16, 17, 22-25, 27, 37, 47, 60